

「大本経」類における過去仏の初転法輪記事

天 野 信

はじめに

現存するブッダの伝記（以下「仏伝」と呼ぶ）の形態・内容は、時代・地域・信仰形態等の影響から多種多様なものとなっているが、誕生から般涅槃に至るブッダの全生涯について記す文献の出現について Étienne Lamotte 氏は、紀元 2 世紀まで待つ必要があるとして、具体的な仏伝文献として、馬鳴（Aśvaghoṣa）作の *Buddhacarita* 等を挙げている。^① 全生涯を記す仏伝が出現する背景には、様々な要素があるであろうが、その成立過程及び原型を追求するとなると、初期仏教文献（阿含経典・律蔵等）に含まれる仏伝の研究が不可欠となる。^② これらの仏伝は、ブッダの生涯を断片的に記すものである。^③ 一方で、初期仏教文献には、過去仏の伝記が存在する。過去仏の伝記は、「大本経」類に保存される「ヴィパッシン仏伝」に集約される。^④ 「ヴィパッシン仏伝」は、ヴィパッシン菩薩の誕生から始まり、ヴィパッシン王子の具える三十二相についての説明・四門出遊・出家・成道・梵天勧請・初転法輪・サンガの成立、最後にヴィパッシン仏による波羅提木叉の誦出・制定についてが記されており、過去仏の伝記とはいえ、極めて纏まった仏伝の体裁を保つ。^⑤ 上記の内容に涅槃記事が加われば全生涯について記す内容となるため、全生涯を記す仏伝の出現と深く関わってくる可能性を有している。^⑥

さて、「ヴィパッシン仏伝」が、ブッダ・釈尊の伝記を模倣して作成されたのか、否かという問題に関しては諸説あるが、この問題は「ヴィパッシン仏伝」に含まれる記事によって事情は異なると考えるべきである。^⑦ 故にこの問題を解明するには、ヴィパッシン仏にまつわる事蹟ごとの調査・検討が必要となる。その際、所属部派が一致する仏伝文献との比較が基本作業となる。この作業は、初期仏教文献における仏伝形式の一形態を定義するうえでも重要である。「ヴィパッシン仏伝」に保存されている事蹟は、岡野潔氏が指摘されるように、「大本経」類が編纂された当時、存在した仏伝の複製である可能性がある。^⑧ 現存の仏伝には示されない内容が、

「ヴィパッシン仏伝」に保存されているとすれば、失われた仏伝の形態を再構築することも可能となる。しかし、「ヴィパッシン仏伝」には、仏伝の模倣ではなく、過去仏の伝記のために^⑨編纂された事蹟が存在する可能性も当然あるので慎重に峻別しなければならない。同時に、仏伝が、「ヴィパッシン仏伝」に含まれる事蹟を模倣した可能性を検討する必要もあろう。

本稿では、上記の問題意識を持ったうえで、「ヴィパッシン仏伝」における初転法輪記事に着目する。この記事が、仏伝に記されるブッダの初転法輪記事と内容面で一致しないことを確認する。そして「ヴィパッシン仏伝」における過去仏の初転法輪記事は、パーリ律『四分律』^⑩『五分律』の受戒毘度部に含まれている仏伝が記す、ブッダが在家者を教化する際に用いる説法内容と一致（あるいは類似）することを論証する。ここでは、パーリ上座部に所属する *Mahāpadānasuttanta*（以下 MAP）が保存する「ヴィパッシン仏伝」と、パーリ律受戒毘度部の仏伝を中心に比較・検討する。同時に、共に法蔵部に属し、訳者も仏陀耶舎・竺仏念と共通する『大本経』と『四分律』受戒毘度部の仏伝との比較・検討は有効であるので、併せて考察する。

1. ブッダの初転法輪記事

「大本経」類における過去仏の初転法輪記事について検討する前に、ブッダの初転法輪記事について確認しておく。この記事は、一般に「転法輪経」と総称される文献に保存されている。諸部派が伝える「転法輪経」は、二十三種に達し、細かな形態・内容は文献によって異なるが、ブッダが、かつて共に修行した五人の比丘たちに四聖諦の教えを説くという形式が基本となっている^⑪。そして、仏伝の一部として組み込まれた初転法輪記事を検討するとすると、受戒毘度部の仏伝が重要となる。この仏伝の内容は、パーリ律では、ブッダ成道後の十二支縁起観察記事から始まり、梵天勧請・初転法輪・サンガの成立・ヤサ親子等在家者への説法教化・カッサパ三兄弟の帰依・マガダ国王ビンピサーラの帰依および竹林精舎の寄進、そして最後にサーリプッタとモッガラナ^⑫の帰依が記されており、ある程度整った仏伝の形態を持つ文献としては、最初期段階の成立であると考えられている（*Vinaya. I* pp.1-44）。また、受戒毘度部の仏伝がサーリプッタとモッガラナの帰依で終了する事に関して平川彰氏は、この仏伝がブッダの生涯の事蹟について説明するのが目的ではなく、受戒毘度部で具足戒作法が定められる以前の比丘たちの具足戒を説明することが目的であるので、サーリプッタとモッガラナの帰依によって1250人の大集団となったサンガが完成し、現行の具足戒作法の制定が必要となった時点で仏伝は終了しなければならないことを指摘する。受戒毘度部の仏伝が『四分律』『五分律』のように、成道以前の事蹟が付加される場合はあっても、サーリプッタとモッガラナの帰依以降の物語が記されないのはそのためであると考えられる。^⑬以下パーリ律受戒毘度部におけるブッダ

の初転法輪記事 (*Vinaya. I* pp.7-14) の内容を概略しておく。

ブッダは、バーラーナシーのイシパタナにある鹿野園において、かつての仲間であった五人の比丘たち (コンダンニャ・ヴァッパ・パッディヤ・マハーナーナ・アッサジ) に対して、中道説・八聖道 (*Vinaya. I* p.10)、三転十二行相による四聖諦の説明 (*Vinaya. I* pp.10-11)、五蘊無我説 (*Vinaya. I* p.13) を示す。ここでの中道説、四聖諦説の内容は、*Samyuttanikāya*, 56-11 *Tathāgatena vuttā 1* (*SN. V* pp.420-424) と一致し、五蘊無我説は、*Samyuttanikāya*, 22-59 *Pañca* (*SN. III* pp.420-424) に一致する^⑭。そして、説法を聞いた五人の比丘たちは、ブッダのもとで具足戒を得ることとなる。『四分律』『五分律』の受戒羯度部における初転法輪記事も、細かな相違点はあるものの、構成としてはほぼ同じ形態である (大正22、pp.787c-789b、pp.104b-105a)^⑮。

以上が、パーリ律受戒羯度部における仏伝を中心としたブッダの初転法輪記事の概要である。「ヴィパッシン仏伝」における過去仏の初転法輪記事は、これらの文献が記すブッダの初転法輪記事とは、内容・構成とも大きく異なっている。そのことについて次章以降で検討していく。

2. 「ヴィパッシン仏伝」における過去仏の初転法輪記事

MAP の内容を概略すると以下の通りである。

〈1〉比丘たちの間で前生に関する談話が起る。〈2〉それに答える形で、ブッダが比丘たちに過去七仏それぞれの生まれた時代、生まれ、姓、寿命、菩提樹、二大弟子、サンガの構成、侍者、父母、王都の名称を述べる (「七仏の事蹟」)。ここで一度、ブッダは比丘たちの前から去る。〈3〉再び現れたブッダは第一仏であるヴィパッシン仏の伝記を、比丘たちに語り始める (「ヴィパッシン仏伝」)。〈4〉最後に、浄居天の神々が、ヴィパッシン仏の事蹟をブッダに語る。

上記の様に「七仏の事蹟」と「ヴィパッシン仏伝」が本経の大半を占める構成となっている。『大本経』・梵本とも同じ構成を持つ。「七仏の事蹟」と「ヴィパッシン仏伝」の成立の順序については、『大本経』の異訳である漢訳文献の比較・検討から、「七仏の事蹟」に相当する内容を持つ文献が先に存在し、その後で「ヴィパッシン仏伝」が成立したと考えられている^⑯。

以下、*MAP* が保存する「ヴィパッシン仏伝」の初転法輪記事を検討する。

[資料1]

‘Atha kho bhikkhave Vipassissa bhagavato arahato sammā-sambuddhassa etad ahosi: “Kassa nu kho ahaṃ paṭhamam dhammam deseyyam, ko imaṃ dhammam khippam eva ājānissatīti?”

‘Atha kho bhikkhave Vipassissa bhagavato arahato sammā-sambuddhassa etad ahosi: “Ayaṃ kho Khaṇḍo ca rāja-putto Tisso ca purohita-putto Bandhumatiyā

rāja-dhāniyā paṭivasanti paṇḍitā vyattā medhāvino dīgha-rattaṃ apparajakkha-jātikā. Yannūnāhaṃ Khaṇḍassa ca rāja-puttassa Tissassa ca purohita-puttassa paṭhamam dhammam deseyyam, te imam dhammam khippam eva ajānisantīti.” (DN.II p.40)

〈訳〉 さて、比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊は、次のように考えた。「私は誰のために最初に法を示すべきであるか。誰がこの法をすぐに理解するであろうか」と。

さて、比丘たちよ、阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊は、次のように考えた。「王都バンドゥマティーに住んでいる、かの王子カンダと司祭の子ティッサは、賢く、聡明であって、智慧があり、長い間、塵垢の少ない人たちである。私は、王子カンダと司祭の子ティッサに、最初の法を示すことにしよう。彼らは、この法をすぐに理解するであろう」と。

このように、ブッダの初転法輪が五比丘に説かれるものであるのに対し、「ヴィパッシン仏伝」における過去仏の初転法輪は、王子であるカンダと司祭の子であるティッサに対して説かれるものとなっている。つまり、出家修行者ではなく、在家者が初めての説法対象者として選ばれたことになる。このカンダとティッサについて、「七仏の事蹟」はサーリプッタとモッガラナに相当する「最上の賢者の一組」であると記す (DN.II pp.4-5)^⑮。となると、ヴィパッシン仏は、ブッダの二大弟子に相当する人物に対して、初めての説法を行ったことになる。『大本経』・梵本の「七仏の事蹟」にも同様の記事が存在する (大正1、pp.2c-3a、ed.Waldschmidt, pp.76-77, ed.Fukita, pp.42-44)^⑯。

この後、王都バンドゥマティーに近いケーマ鹿野園において、ヴィパッシン仏による初めての説法が行われる。^⑰

[資料2]

‘Tesaṃ Vipassī bhagavā araham sammā-sambuddho ānupubbi-katham kathesi, seyyathidam dāna-katham sīla-katham sagga-katham kāmānam ādinavam okāram saṃkilesam nekkhamme ānisaṃsam pakāsesi. Yadā te bhagavā aññāsi kalla-citte mudu-citte vinīvaraṇa-citte udagga-citte pasanna-citte, atha yā Buddhānam sāmukkaṃsika dhamma-desanā tam pakāsesi, dukkham samudayaṃ nirodham maggaṃ. Seyyathā pi nāma suddham vattham apagata-kāḷakam sammad eva rajanam paṭigaṇheyya, evam eva Khaṇḍassa ca rāja-puttassa Tissassa ca purohita-puttassa tasmim yeva āsane virajam vitamalam dhammacakkhum upapādi:

“Yaṃ kiñci samudaya-dhammaṃ, sabbaṃ taṃ nirodha-dhammaṃ ti.” (DN.II p.41)

〈訳〉 阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊は、彼らに次第説法をした。つまり、施論・戒論・生天論を、様々な愛欲の過失、下卑、汚れを、離欲における功德を明らかにした。世尊は、彼らが従順な心になり、柔らかな心になり、障りのない心になり、最上の心になり、淨い心になったことを知ると、仏陀たちのすぐれた法の教え、[つまり] 苦・集・滅・道 [の四聖諦] を説明した。すると、まるで汚れのない清浄である衣が、正しく染料を受けとるように、座所にて、王子カンダと司祭の子ティッサに、塵を離れ、垢を離れた法の眼が生じた。[その内容は] 「生じる法は、なんであろうと、すべて滅する法である」と [いうものであった]。

この様に四聖諦説については記すが、その内容は、パーリ律受戒毘度部の仏伝などにおけるブッダの初轉法輪記事とは全く一致しない。この後、二人の出家・受戒^{②①}についてが記される (DN.II pp.41-42)。このカンダとティッサに対する初轉法輪記事の後、二人を慕う、王都バンドゥマティーの群衆八万四千人に対しても [資料2] と同様の説法が示され、みな出家することとなる (DN.II pp.42-43)。

さて、この過去仏の初轉法輪記事で着目すべきことは、[資料2] の「次第説法 (ānupubbikathā)」という用語で示される説法の内容である。^{②②}『大本經』も [資料2] に相当する記事を持つ。ここでは、毘婆尸仏が王子である提舍と大臣の子である騫荼^{②③}に対して初めて説法をする設定になっている (大正1, p.8c)。以下その内容を示す。

[資料3]

佛漸為説法。示教利喜。施論戒論生天之論。欲惡不淨上漏為患。讚歎出離為最微妙清淨第一。爾時世尊見此二人心意柔軟。歡喜信樂堪受正法。於是即為説苦聖諦。敷演開解。分布宣釋苦集聖諦苦滅聖諦苦出要諦。爾時王子提舍大臣子騫荼。即於座上遠離塵垢得法眼淨。猶若素質易為受染。(大正1, p.9a)

〈訳〉 仏は [二人の] ために、次第に法を説き、教えを示し喜ばせた。[その内容は] 施論・戒論・生天論であり、欲望を悪・不淨のものとし、上漏を災難であるとし、出離を讃え、[それを] 最も優れていて、最も清らかなものであるとする [ものであった]。その時、世尊はこの二人の心が柔らかく、歡喜して、信じ願い、正しい教えを受けるに十分であると判断した。そこで、ただちに [二人の] ために苦聖諦を説き、解釈を詳細に示し、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦出要諦の特質を解き明かした。その時、王子である提舍と大臣の子である騫荼は、ただちに座所にて煩惱から離れ、法を見る正しい眼を得た。それはまるで白いものが染料を受けやすいようなものであった。

この後、提舎と騫茶は、毘婆尸仏のもとで具足戒を得る。さらに毘婆尸仏は二人に対して神足・観心・教誡の三つの教えを示す（大正1, p.9c）。以上の様に、MAP・『大本経』の初転法輪記事は、二人の在家者に対して施論・戒論・生天論と四聖諦説を組み合わせた説法を示す内容となっている。しかし、梵本の初転法輪記事には「次第説法」に相当する用語は存在せず、内容も王子 Khaṇḍa と大臣の子である Tiṣya に対して神通神変・観察他心神変・教誡神変の三種の神変 (tris prātihārya) を記すのみであり (ed.Waldschmidt, p.152, ed.Fukita, p.148)、MAP・『大本経』とは異なる伝承となっている。『毘婆尸仏経』では過去諸仏が説いた「妙法」として、欠拏太子と近臣帝鉢嚕に説法を行う。説法の内容は MAP・『大本経』に類似する。また、二人が具足戒を得た後は、『大本経』同様、三種の神通についてが記される（大正1, p.157a²³）。

さて MAP の [資料 2] と逐語的に一致するブッダの説法が、パーリ律受戒犍度部の仏伝に存在する。それは、第 1 章で確認したブッダが五比丘に対して行う初転法輪記事には含まれず、別の箇所が存在する。同様に『大本経』の [資料 3] に関しても、『四分律』受戒犍度部の仏伝に、類似する内容の説法が存在するが、ここでは、パーリとは若干異なる伝承形態となっている。そのことについて、次章で検討していく。

3. 「次第説法」について

「ヴィパッシン仏伝」が記す「次第説法」と同内容の記述が、パーリ律受戒犍度部の仏伝に存在する。先述したブッダの初転法輪記事の直後に設置される、良家の子息ヤサとその父親への説法が [資料 2] と一致する。つまり、「ヴィパッシン仏伝」の初転法輪記事同様、在家者への説法となる。以下その箇所を示す。

[資料 4]

ekamantaṃ nisinnassa kho Yasassa kulaputtassa bhagavā anupubbikathaṃ kathesi seyyath' idaṃ: dānakathaṃ silakathaṃ saggākathaṃ kāmānaṃ ādīnavaṃ okāraṃ saṃkilesaṃ nekkhamme ānisaṃsaṃ pakāsesi. yadā bhagavā aññāsī Yasassa kulaputtaṃ kallacittaṃ muducittaṃ vinīvaraṇacittaṃ udaggacittaṃ pasannacittaṃ, atha yā buddhānaṃ sāmukkaṃsika dhammadesanā taṃ pakāsesi, dukkhaṃ samudayaṃ nirodhaṃ maggaṃ. seyyathāpi nāma suddhaṃ va tthaṃ apagatakalākaṃ sammad eva rajanaṃ paṭigaṇheyya, evam eva Yasassa kulaputtassa tasmaṃ yeva āsane virajaṃ vitamalaṃ dhammacakkhuṃ udapādi yaṃ kiñci samudayadhammaṃ sabbhaṃ taṃ nirodhadhammaṃ ti. (Vinaya. I pp.15-16)

〈訳〉 世尊は、傍らに座った良家の子息であるヤサに、次第説法をした。つまり、施論・戒論・生天論を、様々な愛欲の過失、下卑、汚れを、離欲における功德を明らかにした。

世尊は、良家の子息であるヤサが従順な心になり、柔らかな心になり、障りのない心になり、最上の心になり、淨い心になったことを知ると、仏陀たちのすぐれた法の教え、[つまり] 苦・集・滅・道 [の四聖諦] を説明した。すると、まるで汚れのない清淨である衣が、正しく染料を受けとるように、座所にて、良家の子息であるヤサに、塵を離れ、垢を離れた法の眼が生じた。[その内容は] 「生じる法は、なんであろうと、すべて滅する法である」と [いうものであった]。

この後、ヤサの父にたいしても [資料2] [資料4] と同様の「次第説法 (ここでは anupubbikathā)」が説示される。その後の内容も、注②で挙げた「ヴィパッシン仏伝」の記述とほぼ一致する。但しここでは、ヤサの父は三帰依を唱え最初の優婆塞となったことが記される (Vinaya. I pp.16-17)。続いてヤサの受戒についてが記される (Vinaya. I pp.17-18)。そして、[資料2] [資料4] と同内容の「次第説法」を聞き、ヤサの母と旧妻が、最初の優婆夷となること、さらに多数の友人たちが出家することが記される (Vinaya. I pp.18-20)。この展開も、「ヴィパッシン仏伝」の初轉法輪記事の後の内容と酷似する。つまり、この説法を用いて、多くの在家者を帰依させ、サンガの数は増大していくこととなる。さて、『四分律』受戒毘度部にも [資料4] に相当するブッダの耶輸伽童子への説法が記されている。

[資料5]

爾時耶輸伽童子。禮世尊已在一面坐。世尊漸與説法。勸令發歡喜心。所謂法者。布施持戒生天之法。呵欲不淨。讚歎出離為樂。即於座上諸塵垢盡得法眼淨。見法得法成就諸法。自身得果證。前白佛言。我欲於如來所淨修梵行。佛言。比丘來。於我法中快自娛樂。修梵行盡苦源。時耶輸伽。即受具足戒。(大正22、p.789b-c)

〈訳〉 その時耶輸伽童子は世尊に挨拶し、面前に坐った。世尊は [耶輸伽童子の] ために、次第に法を説き、心力を尽くして歡喜の心を起こさせた。その法 [の内容] は、布施・持戒・生天 [について] の法であり、欲望を不淨のものであると咎め、出離を楽しみとすることを讃えるもの [であった]。[その時、耶輸伽童子は] ただちに座所にて諸々の煩惱が消え去り、正しい法の眼を得て、法を見て、法を得て、諸々の法を成就して、自身の果報としての悟りを得たのである。[そこで耶輸伽童子は] ブッダに申し出た。「私は如来もとで梵行を修めたいと思います」と。「来なさい、比丘よ。私の教えのもとで、快く自身を観じて心をやすめ、梵行を修めて苦の源を消し去りなさい」と。その時、耶輸伽は具足戒を受けた。

このように、『大本經』での [資料3] と同様、在家者に対して施論・戒論・生天論を説示

する内容となっているが、ここで重要なのは、パーリ律とは異なり、四聖諦について全く記されていない^{②④}ことである。この後、マガダ国の在家者達に対しても四聖諦説を含まない〔資料5〕の説法が示される（大正22、p.797c）。『四分律』受戒犍度部の仏伝で注意すべき点は、〔資料5〕の直前に設置されているブッダの初転法輪記事に含まれている。ここではブッダが五比丘に対して中道説・八正道・三転十二行相による四聖諦を説示する。その説法によって五比丘の一人である阿若憍陳如は、塵垢が尽きて、法眼を得て受戒することが記される。このブッダの説法の内容が、神々たちにも知れ渡り、讃えられるのだが（大正22、pp.788b-c）、これと全く同内容の記述が『大本経』の初転法輪記事にも存在する（大正1、p.9a^{②⑤}）。さらに注目すべき点は、その後に記される阿若憍陳如以外の残り四人の比丘に対しての説法内容が、上記の〔資料5〕で挙げた耶輸伽童子への説法とほぼ一致することである（大正22、pp.788c-789a）。つまり、四聖諦等を説示した後、残り四人の比丘のために〔資料5〕と同様の施論・戒論・生天論を示すことによって、彼らも法眼を得て、受戒することが記されている。これはパーリ律・『五分律』の受戒犍度部における初転法輪記事にはない形式である。パーリ律・『五分律』とも「残りの比丘たちを法話によって教誡した」と簡略に記すのみである（*Vinaya. I* p.12, 大正22、p.105a）。以上のことから、『四分律』受戒犍度部の〔資料5〕が四聖諦説を含まない理由は、その直前に設置されている初転法輪記事における三転十二行相による四聖諦説等を前提としているからであろう。また、受戒犍度部の仏伝は『四分律』が最も新しいであろうから（注⑩参照）、『四分律』の初転法輪記事における施論・戒論・生天論は、パーリ律・『五分律』同様、本来は存在しなかったと考えられる。

さて、〔資料2〕〔資料4〕で記される「次第説法」は、パーリ文献中、他の箇所にも複数存在する^{②⑥}。パーリ律受戒犍度部の仏伝では、ビンピサーラ王とマガダ国のバラモン・家長たちに対しても、同様の「次第説法」が説示され、一万人が優婆塞となることが記されている（*Vinaya. I* pp.36-37）。この説法は、他の箇所でも在家者やバラモン・異教徒等に対して説示されており、すべて仏教に帰依する内容となっている^{②⑦}。『大本経』が記す〔資料3〕と一致する説法も、同じ『長阿含経』中に複数存在する^{②⑧}。そして、「ヴィパッシン仏伝」の用例以外は、すべてブッダの説法として用いられている（ブッダの初転法輪記事には用いられていない）。このことから、現時点では、律蔵受戒犍度部などの仏伝に記されるブッダの「次第説法」を、「ヴィパッシン仏伝」が引用し、過去仏の初転法輪記事として用いた可能性が高いと考える。また、ブッダの「次第説法」を聞いた者は、パーリ・漢訳とも先に述べたヤサの父がそうであったように、三帰依を唱え優婆塞となる形式が多い。このことから時間設定をサンガ成立後にとっていると判断できよう。そのためこの説法は、第1章で確認したブッダの初転法輪記事よりも遅い成立であると考えられるが、より詳細な調査が必要である。

まとめ

本稿の内容をまとめる。「大本経」類が保存する「ヴィパッシン仏伝」における過去仏の初転法輪記事が、律蔵受戒毘度部の仏伝などが記すブッダの初転法輪記事とは異なることを確認した。そして「ヴィパッシン仏伝」の初転法輪記事は、パーリ・漢訳文献中に複数存在する、在家者・バラモン・異教徒・資産家に対して説示されるブッダの「次第説法」と内容が一致することを指摘した。また、ブッダの「次第説法」を、「ヴィパッシン仏伝」が引用し、過去仏の初転法輪記事として用いた可能性を示唆した。時間設定をサンガ成立後とする形式が多いブッダによる「次第説法」が、ブッダの初転法輪記事の後に成立したものであれば、それを引用した「ヴィパッシン仏伝」の初転法輪記事も、当然ブッダの初転法輪記事よりも後の成立となる。同時に、「ヴィパッシン仏伝」の初転法輪記事は、ブッダの初転法輪記事の模倣ではなく、ブッダの他の説法を模倣したことを指摘することが出来る。但し梵本に関しては、施論・戒論・生天論と四聖諦説を組み合わせた「次第説法」によって示される過去仏の初転法輪とは異なる内容であるため、説一切有部系の伝承として別個に考察する必要がある。また〔資料5〕と同内容の説法が、受戒毘度部の仏伝では最も新しい『四分律』の初転法輪記事に含まれていることから、法蔵部では、施論・戒論・生天論が、過去仏のみでなく、ブッダの初転法輪にも組み込まれるようになった可能性が指摘出来る。

ではなぜ、ブッダの初転法輪記事とは異なる内容が、過去仏の初転法輪記事として、「ヴィパッシン仏伝」に組み込まれたのか。ここで一つの仮説を示す。「ヴィパッシン仏伝」が編纂される前段階において、ブッダの初転法輪については、五比丘に対して三転十二行相の四聖諦等を示す説法が広く認知されていた。これは「転法輪経」の数からも十分考えられる。そのため、仏伝には、この形式の初転法輪記事が挿入されることとなる。しかし、平川彰氏が指摘されるように、仏伝が、本来ブッダの生涯を示すことが目的ではなく、別の事柄を示すために成立したものであれば、当然既存のブッダの事蹟では、不都合が生じる場合もあるであろう。そうすると、仏伝とは異なった事蹟を含む伝記の作成が必要となる。その一つとして、過去仏の伝記である「ヴィパッシン仏伝」が成立したと考えられる。また、「ヴィパッシン仏伝」の初転法輪記事が、ブッダの「次第説法」を引用していることから、この伝記は、在家者の受具足戒を強く意識して作成された要素があるものとする。初転法輪において、「転法輪経」が記すような、出家者に対する中道説や三転十二行相による四聖諦説を用いず、在家者に対する「次第説法」を用いることによって、具足戒を与え、比丘の数は激増し、サンガは巨大化していくこととなる。経典中で「次第説法」が多用される背景には、「ヴィパッシン仏伝」が編纂された当時の在家者の教団への影響力、それによって生じるサンガの巨大化といったこともあ

るのであろう。また、在家者のみでなく、バラモン・異教徒に対しても説示されるこの説法は、本来、如何なる目的で説示されたものであるのか。その成立と変遷については、パーリ・諸漢訳等による詳細な検討が必要である。^{③⑩}

先述したように、「ヴィパッシン仏伝」は、その構成から、全生涯を記す仏伝の出現と深く関わるものと考えられる。初期仏教文献において、仏伝に含まれる様々な記事は、ブッダの事蹟として成立したものが多くであろうが、生涯の全伝に近い、より纏まった伝記は、ブッダ・釈尊の伝記よりも先に、過去仏の伝記として集約・編纂された可能性を検討する必要がある。特に「ヴィパッシン仏伝」が、成道以前の事蹟を含んでいることは、留意すべきことである。初期仏教文献において、ある程度纏まった仏伝は、多くが成道以降の事蹟から記すものであるからである。以上の事柄に関しては、本稿で検討した箇所もそうであったように、「ヴィパッシン仏伝」が律蔵の記述と密接に関わっている点に注意を払うべきである。^⑪ 仏伝が、受戒羯度部などから分離・派生するケースは当然あるであろう。^⑫ 「ヴィパッシン仏伝」にも、その要素はあると考えられる。そこで考えるべきことは、分離・派生した仏伝の編纂目的である。当然、律蔵所載の仏伝とは異なる目的を持つこととなる。さらに「ヴィパッシン仏伝」の場合は、なぜ過去仏の伝記として編纂されたのか、つまり過去仏思想と仏伝の融合についてを併せて考察しなければならない。今後の課題とする。

(パーリ語のテキストはすべて PTS 版を使用)

<略号>

AN. = *Āṅuttaranikāya* (PTS)

DN. = *Dīghanikāya* (PTS)

MN. = *Majjhimanikāya* (PTS)

Vinaya. = *Vinayaṭṭakā* (PTS)

大正 = 『大正新修大蔵経』

注

① Étienne Lamotte, *History of Indian Buddhism*, trans. Sara Webb-Boin (Institut Orientaliste Louvain-La-Neuve, 1988) p.655参照。梶山雄一氏もほぼ同様の見解を持つ。梶山雄一「原始仏典10 ブッダチャリタ」(講談社、1985) pp.476-478参照。

② 阿含・ニカーヤ、律蔵に含まれる仏伝については、外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究(上)』(大東出版社、1995) pp.43-48に列挙されている。また、増谷文雄氏は、意図的に編纂された初期の仏伝文献として、パーリ律大品 *Mahākhandhaka* に含まれる仏伝、*Ariyapariyesanasutta* (MN.26)、*Mahāparinibbānasuttanta* (DN.16) を詳細に分析された。増谷文雄『仏陀の伝記—資料の研究—(増谷文雄著作集5)』(角川書店、1981) pp.106-339参照。

③ 現存の初期仏教文献が残す断片的な仏伝が、纏まった伝記から分離したものであるとする考え

も否定することは出来ないが、その可能性は極めて低い。

④・*Mahāpadānasuttanta* (DN.14, DN.II pp.1-54.)

・『長阿含經』卷第1「大本經」後秦・仏陀耶舎・竺仏念訳(大正1, No.1, pp.1b-10c、本稿では『大本經』と表記する。)

中央アジアで発見された上記二經に対応する梵本の断簡も存在し、Waldschmidtにより校訂出版された。E.Waldschmidt, *Das Mahāvadānasūtra* Teil.1,2. (AKADEMIE-VERLAG Berlin, 1953, 1956) 梵本の所属部派は、説一切有部系である可能性が高い。草間法照『*Mahāvadānasūtra* に関する一考察』『印度学仏教学研究』22-1 (1973) pp.383-388 参照。また近年、吹田隆道氏の校訂により以下のテキストが出版された。Takamichi Fukita, *The Mahāvadānasūtra A new edition based on manuscripts discovered in northern turkestan* (Vandenhoeck&Ruprecht, 2003) 本稿では、パーリ本・梵本・『大本經』を総称する際、「大本經」類と表記する。

⑤「ヴィパッシン仏伝」について、平等通照氏は「断片的な仏伝しかない阿含聖典の中で特異な存在をなしている」と指摘する。平等通照『佛陀の死』(印度学研究所、1961) p.32参照。ヴィパッシン菩薩誕生記事の成立過程と問題点に関しては、拙稿『希有未曾有法經』における菩薩誕生記事の問題点』『龍谷大学大学院文学研究科紀要』27 (2005-C) pp.1-16参照。また、ヴィパッシン仏による波羅提木叉制定箇所成立に関しては、拙稿『*Mahāpadānasuttanta* とパーリ律經分別の関係』『パーリ学仏教文化学』18 (2005-A) pp.77-84参照。

⑥ 平川彰氏は、「ヴィパッシン仏伝」の内容から、「大本經」類には、後に下天・托胎・降誕・出家・降魔・成道・転法輪・入涅槃の八つに分けてブツダの一生を示す「八相成道」の思想に発展する要素があることを指摘する。平川彰『仏教入門』(春秋社、1992) pp.133-137参照。また、パーリ聖典では後期の成立である *Buddhavamsa* には、簡単ではあるが、ヴィパッシン仏の涅槃について記されている (*Buddhavamsa*, p.79)。

⑦「大本經」類の「ヴィパッシン仏伝」が、「釈尊の伝記を模倣して作成された」とするものは、平等通照 [1961] p.32. 干潟龍祥「インド仏教重要事項年代考」『鈴木学術財団研究年報』12/13 (1976) p.8. また岡野潔氏は「実質的に本經の大きな部分を占めるヴィパッシン仏の仏伝は、編集当時存在したであろう原始的な釈迦牟尼の仏伝の、固有名詞だけを入れ替えた複製といえるものである」と述べる。岡野潔「偉大な過去世の物語-大本經-」『原始仏典』第2巻(春秋社、2003) p.481 参照。一方で、R.Otto Franke氏は、仏陀の理想型である「ヴィパッシン仏伝」から、釈尊伝が成立したと推定した。R.Otto Franke “Der dogmatische Buddha nach dem Dighanikāya” *WZKM*, 28-4 (1914) pp.331-355. しかし、上記の説に対して岡野潔氏は「ヴィパッシン仏の仏伝が出来た長阿含の成立期まで、釈迦の仏伝が暗に形成されていなかったはずはないから、釈迦の仏伝がヴィパッシン仏の仏伝に応用されたと考えたほうがよい」と述べる。岡野潔「仏陀の永劫回帰信仰」『論集/印度学宗教学会』17 (1990) p.3 参照。他に中村元氏も、釈尊の伝記が「ヴィパッシン仏伝」を借用したという可能性を示唆する。中村元『ゴータマ・ブツダ I <選集決定版11>』(春秋社、1992) p.7 参照。また、石上善応氏は、菩薩誕生記事に含まれる誕生偈と、四門出遊記事は「ヴィパッシン仏伝」がもっとも古形であろうと述べる。石上善応「仏伝と仏伝文学」『大正新修大藏經会員通信』39 (1964) p.2 参照。

⑧ 上記注⑦参照。

⑨「ヴィパッシン仏伝」が保存する菩薩誕生記事については、元来、過去仏の誕生記事として編纂された可能性を既に示した。拙稿 [2005-C] 参照。

⑩ 以下の箇所には仏伝が含まれる。パーリ律「大品」*Mahākhandhaka* (*Vinaya*. I pp.1-44)、『四分律』「受戒撻度」姚秦仏陀耶舎・竺仏念等訳(大正22, No.1428, pp.779a-799b)、『五分律』「受

戒法」宋麗賓三藏仏陀什共竺道生等訳（大正22、No.1421, pp.101a-110c）。これらは、出家受戒作法について記す箇所である。所謂禪度部の呼称は律によって異なる。本稿では、この箇所を「受戒禪度部」と統一して呼ぶことにする。受戒禪度部の仏伝については、平川彰『律蔵の研究II（著作集10）』（春秋社、2000）pp.97-178で詳細に検討されている。成立の新古に関しては、パーリ律が最も古形を残しており、次に『五分律』、そして『四分律』が最も新しいとされている。また、『根本説一切有部律』『破僧事』に保存される仏伝については、佐々木閑『『根本説一切有部律』にみられる仏伝の研究』『西南アジア研究』24（1985）pp.16-34参照。

- ⑪ 「転法輪経」については、水野弘元「転法輪経について」『佛教研究』創刊号（1970）p.114-92で詳細に検討されている。ここでは、初転法輪によって、五比丘が阿羅漢となるまでの記事を含む文献を「転法輪経」としている。その説法の内容は、文献によって異なるが、a 中道説、b 四諦説、c 五蘊無我説のうち、bだけのもの、aとbを含むもの、a,b,cのすべてを含むものに分類できる。水野氏は「あらゆる仏教経典の中で、転法輪経ほど多くの同一経典が伝えられているものは他に例を見ない。転法輪の事実が仏教者の間にもっとも深く関心が持たれていたことを意味する。多くの時代・地域や多くの系統の人々によって関心がもたれればもたれるほど、それは様々な修飾や変容を受けるのは当然である」と指摘する。また、初転法輪記事が記される初期仏教文献・仏伝文献については、森章司・本澤綱夫・岩井昌悟編「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究【3】』（中央学術研究所、2000）pp.113-125に列挙されている。他にブッダの初転法輪および「転法輪経」については、中村元[1992] pp.478-515参照。ここでは、初転法輪と四諦説等の教説が結びついたのはかなり後世のことであるとされる。そのため、五比丘への初転法輪については記すが、説法の内容は記さない *Ariyapariyesanasutta* (MN.26) が「もっとも古いかたちで、最初の説法の内容の片鱗を伝えている (pp.488-489)」と指摘する。
- ⑫ 平川彰 [2000] p.176参照。また、『四分律』『五分律』では、ブッダの成道以前についても記す（大正22、pp.779a-781a, pp.101a-102c）。この箇所は後に付加されたものと考えられる。増谷文雄 [1981] pp.131-139参照。
- ⑬ 平川彰 [2000] pp.97-178参照。
- ⑭ 水野弘元 [1970] p.112, p.110参照。この中道説、四聖諦説は *Paṭisambhidāmagga* にも保存される (*Paṭisambhidāmagga* II pp.147-150)。
- ⑮ パーリ律『四分律』『五分律』とも類似した記事を持つが、細かな相違点については、水野弘元 [1970] pp.107-103において詳細に論じられている。
- ⑯ 『大本経』には以下に挙げる四本の異訳が存在する。
 - ・『仏説七仏経』1巻、宋・法天訳（大正1, No.2, pp.150a-154a）
 - ・『毘婆尸仏経』2巻、宋・法天訳（大正1, No.3, pp.154b-159a）
 - ・『七仏父母姓字経』1巻、失訳（大正1, No.4, pp.159a-160a）
 - ・『増一阿含経』不善品第4経、東晋僧伽提婆訳（大正2, No.125, pp.790a-791b）
 『七仏経』は「七仏の事蹟」部分と毘婆尸菩薩誕生記事を保存し、『毘婆尸仏経』は毘婆尸太子の四門出遊記事から毘婆尸仏による波羅提木叉の誦出・制定記事までを保存する。『七仏父母姓字経』『増一阿含経』は、「七仏の事蹟」部分のみ保存する。『七仏経』と『毘婆尸仏経』は二つ合わせると「大本経」類に相当する内容となるため、「大本経」類の成立過程を考察するうえで重視されてきた。過去の研究については拙稿 [2005-C] p.15参照。
- ⑰ *Vipassissa bhikkhave bhagavato arahato sammāsambuddhassa Khaṇḍa-Tissaṃ nāma sāvaka-yugaṃ ahosi aggaṃ bhadda-yugaṃ*. 比丘たちよ、阿羅漢であり、正等覚者であるウィ

パッシン世尊には、カンダとティッサという名の二弟子、最上の賢者の一組がいた。

Mayham bhikkhave etarahi Sāriputta-Moggallānaṃ nāma sāvaka-yugam ahosi aggaṃ bhadda-yugam. 比丘たちよ、現在、私には、サーリプッタとモッガラナという名の二弟子、最上の賢者の一組がいる。

- ⑱ 「七仏の事蹟」部分のみを保持する文献では、『七仏父母姓字経』に同内容の記事がある（大正1, p.160）。また『七仏経』は声聞第一の弟子として毘婆尸如来には欠拏底寫・ブッダには舍利弗がいることを記す（大正1, pp.151a-b）。『増一阿含経』には対応記事は存在しない。

- ⑲ ケーマ鹿野園について、注釈書は以下の説明をする。

Kheme miga-dāye ti Isipatanaṃ tena samayena Khemaṃ nāma uyyānaṃ hoti, migānaṃ pana abhaya-vās' atthāya dinnattā: Migadāyo ti, vuccati. Taṃ sandhāya vuttaṃ: Kheme miga-dāye ti. (*Sumaṅgalavilāsini*, II p.471) 〈訳〉 その時、イシパタナはケーマという名の園であった。鹿たちが恐怖なく住めるために与えられたことから、ミガダーヤ（鹿に与えられた場所）と言う。そのため、それをケーマ鹿野園と呼んだ。

- ⑳ 'Te diṭṭha-dhammā patta-dhammā vidita-dhammā pariyogāḷha-dhammā tiṇṇa-vicikicchā vigata-kathaṃkathā vesāraḷja-ppattā apara-ppaccayā satthu sāsane Vipassim bhagavantaṃ arahantaṃ sammā-sambuddhaṃ etad avocaṃ:

“Abhikkantaṃ bhante, abhikkantaṃ bhante. Seyyathā pi bhante nikkhujjitaṃ vā ukkujeyya, paṭicchannaṃ vā vivareyya, mūlhassa vā maggaṃ ācikkheyya, andhakāre vā tela-pajjotaṃ dhāreyya 'cakkhumanto rūpāni dakkhintīti,' evaṃ eva Bhagavatā aneka-pariyāyena dhammo pakāsito. Ete mayaṃ bhante Bhagavantaṃ saraṇaṃ gacchāma, dhammaṃ ca. Labheyyāma mayaṃ bhante Bhagavato santike pabbajjaṃ, labheyyāma upasampadaṃ ti.”

‘Alatthum kho bhikkhave Khaṇḍo ca rāja-putto Tisso ca purohita-putto Vipassissa bhagavato arahato sammā-sambuddhassa santike pabbajjaṃ, alatthum upasampadaṃ. Te Vipassī bhagavā araḷhaṃ sammāsambuddho dhammiyā kathāya sandassesi samādapesi samuttejesi sampahaṇsesi, saṃkhārānaṃ ādīnaṃ okāraṃ saṃkilesaṃ nibbāne ānisaṃsaṃ pakāsesi. Tesāṃ Vipassinā bhagavatā arahatā sammā-sambuddhena dhammiyā kathāya sandassiyamānānaṃ samādapiyamānānaṃ samuttejiyamānānaṃ sampahaṇsiyamānānaṃ na cirass' eva anupādāya āsavehi cittāni vimuccimsu.

〈訳〉 法を見て、法を得て、法を知り、法を深解し、疑いを脱し、疑惑を離れ、師の教えにおいて、自信を得て、他によることのない彼らは、阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊に次のように答えた。「尊師よ、すばらしいことです。尊師よ、すばらしいことです。尊師よ、まるで、倒れたものを起こすかのように、あるいは、覆われたものを明らかにするように、あるいは、愚鈍なる者に道を説くように、『眼ある者たちは、様々な色を見るのである』と暗闇に燈明を与えるように、まさにそのように、世尊は多くの教説で、法を明らかにしました。尊師よ、この我々は、世尊に、また法に帰依します。尊師よ、我々は、世尊の面前で、出家をしたいと思ひます。また、具足戒を得たいと思ひます」と。

比丘たちよ、王子カンダと司祭の子ティッサは、阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊の面前で、出家し、具足戒を得たのである。阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊は、彼らを法話によって、教示し、訓誡し、奨励し、喜ばせ、様々な行の過失、下卑、汚れを、涅槃における功德を明らかにした。阿羅漢であり正等覚者であるヴィパッシン世尊から法話によって教示され、訓誡され、奨励され、喜ばせられた彼らには、まもなく執着がなくなり、様々な煩惱

から、心は解脱したのである。

- ②① ānupubbi-kathā について M.Cone の *A Dictionary of Pāli* <part1> (PTS,2001) は、an exposition or narrative in a regular order, an account of previous events, a progressive or gradual sermon, instruction step by step 等の意味を与える。MAP の英訳をした Rhys Davids は [資料 2] の ānupubbi-kathā について discourse in due order と翻訳する。T.W.Rhys Davids, *Dialogues of the Buddha*, Vol.2 (PTS,1910) p.34。本稿では、水野弘元『パーリ語辞典』(春秋社、1968) に従って「次第説法」と翻訳する。水野弘元氏は「次第説法」について、「相手の信仰や智慧の進展に従って、各段階ごとに異なった学習や修行法を課し、低いものから高いものへと進ませる指導法である」と述べる。水野弘元「原始仏教における教育思想」『日本仏教学会年報』36 (1971) p.43 参照。また、注釈書は以下のように説明する。

Ānupubbi-kathan ti dānānantaram silaṃ, silānantaram saggaṃ, saggānantaram maggan ti: evaṃ anupaṭipāṭikathāṃ. (*Sumaṅgalavilāsinī*, II p.471)

〈訳〉 次第説法とは、布施の次に戒、戒の次に天、天の次に道というように、順番にする話のことである。

- ②② 梵本は MAP と同様「王子 Khaṇḍa と大臣の子である Tiṣṣa (ed.Waldschmidt, p.149, ed.Fukita, p.144)」と記す。また『毘婆尸佛經』は、「欠拏太子と近臣帝鉢嚕 (大正1、p.156c)」と記す。
- ②③ 爾時毘婆尸佛欲令欠拏歡喜信受開示妙法。佛言。如過去諸佛所說。若布施持戒。精進修行。能離欲色煩惱過失得生淨天。時欠拏太子帝鉢嚕聞是語已。心得清淨。如毘婆尸正等覺心。生正解心不疑心善心軟心廣心無礙心無邊心清淨心。復為宣說苦集滅道。四諦法行種種開示。時欠拏太子帝鉢嚕通達四諦。見法知法。得法堅牢法依法住法不動法不捨法不空法。譬如白疊毛無諸塵垢。悟法之心亦復如是。爾時欠拏太子帝鉢嚕白毘婆尸佛言。如來應正等覺。我願出家受善逝戒。佛言。善哉。今正是時。即與剃髮受具足戒。如是彼佛為彼二人現三種神通。令發精進趣向佛慧。一現變化神通。二現說法神通。三現調伏神通。如是現已。欠拏太子帝鉢嚕勇猛精進。經須臾間真智相應。斷盡諸漏成阿羅漢。
- ②④ 『五分律』におけるブッダの耶舎に対する説法は四聖諦については記すが、施論・戒論・生天論については記していない。
佛為說種種妙法示教利喜。次說四諦苦集滅道。即於坐上遠塵離垢得法眼淨。(大正22, p.105b) この後に記されるマガダ国の人々に対するブッダの説法も同内容である (大正22, p.110a)。
- ②⑤ ブッダの初轉法輪に対する神々の稱賛は、パーリ律受戒犍度部には存在するが (*Vinaya*. I p. 12)、MAP の初轉法輪記事には含まれない。
- ②⑥ *Udāna* (p.49) *Upāllisutta* (MN.56, MN. I pp.379-380) *Brahmāyusutta* (MN.91, MN. II p.145) *Ambatṭhasutta* (DN.3, DN. I pp.109-110) *Kūṭadantasutta* (DN.5, DN. I p.148) *Āṅuttaranikāya* (AN.IV p.186, p.209, p.213) など。
- ②⑦ 雲井昭善『パーリ語佛教辞典』(山喜房佛書林、1997) pp.76-77 参照。また「次第説法」で記される施論・戒論・生天論について藤田宏達氏は、阿含・ニカーヤにおける在家者の実践徳目と生天利益の関係を調査・確認したうえで「布施を行い、戒を守るならば、死後天の世界に生まれること」と解釈する。藤田宏達「原始仏教における生天思想」『印度学仏教学研究』19-2 (1971) p. 412 (901) 参照。
- ②⑧ 「佛漸為説法」で始まるものは『遊行經』(大正1、p.14b)、『究羅檀頭經』(大正1、p.101a)。また「次第説法」で始まるものは『世記經』(大正1、p.136a)。「佛漸為説法」「次第説法」の用語はないが、説法の内容が一致するものは『阿摩昼經』(大正1、p.88a)。神塚淑子氏は、『長阿含

經』に記されるこの説法について「仏が在家信者を導き、入信させる時の定型的な表現」であると説明する。『現代語訳「阿含經典」長阿含經（第1巻）』（平河出版社、1995）p.439参照。また同書で『遊行經』部分を担当する末本文美士氏は、この説法が記される時の展開形式を次のように説明する（p.514）。(1)「施論・戒論・生天之論」を説いて心を柔和にさせる。(2)四諦を説き、法眼を得させる。(3)三帰依の表明。(4)五戒の受持。他に『雜阿含經』にも「次第説法」で始まる同内容の説法が存在する（大正2、p.24a、p.308c、p.319a、全て婆羅門に対して説示される）。パーリ・漢訳阿含經等に含まれる、施論・戒論・生天論と四聖諦を併せて示す形態の説法については、森章司『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』（東京堂出版、1995）pp.185-189に列挙されている。

②⑨ 平川彰 [2000] p.101参照。

③⑩ 「次第説法」については拙稿「パーリ文献が記す *anupubbikathā* の意味」『印度学仏教学研究』55（2006年度刊行）で詳細に論じた。

③⑪ 拙稿「「大本經」類の過去仏と *apadāna/avadāna*」『印度学仏教学研究』53-2、pp.882-880（2005-B）では、律藏經分別にある記事と「大本經」類の關係に着目し、律藏で「隨犯隨制」の概念を示すために記された過去七仏の伝記が一部抜き出され、「大本經」類に挿入され、經典として編纂されたため、經典名に *apadāna/avadāna* の用語が用いられていることを論じた。

③⑫ 例えば *Mahāvastu* は、受戒犍度部の仏伝と類似の記述を多数持ち、大衆部系律藏から抜け出て仏伝として発展したものである可能性が高いとして古くから注目されてきた。平川彰 [2000] pp.111-122 他。

【付記】本稿は平成17年度龍谷仏教学会学術研究発表会（2006年1月26日）において「*Mahāpadāna-suttanta* における過去仏の初転法輪記事」と題して口頭発表した内容に、加筆修正したものである。